

(資料)

鹿児島県歴史資料センター黎明館所蔵

「正風社十番歌合」翻刻

長 福 香 菜

はじめに

鹿児島県歴史資料センター黎明館所蔵「正風社十番歌合」の資料についてはすでに拙稿^①にて考察を加え、明治期の旧公家・旧大名家、御歌所歌人らによって構成されていた和歌結社「正風社」の活動の一端を裏付ける資料であることを明らかにしている^②。また、この歌合で詠まれた歌と判詞についての検討もおこなってきた^③。本資料は、旧公家・旧大名家、御歌所歌人らの明治期における和歌活動や和歌観、そして彼らによって形成されていた文化圏の実態を明らかにする上で大変重要な資料だと言える。そこで本稿では、解題を添えて「正風社十番歌合」の全文を紹介したい。

解 題

鹿児島県歴史資料センター黎明館所蔵。写本。卷子本二軸。題簽「十番歌合 新樹卷」(以下「新樹卷」と略す)、「十番歌合 首夏卷」(以下「首夏卷」と略す)。「新樹卷」縦二九・八厘×横四三七・〇厘、「首夏卷」縦二九・八厘×横四四〇・〇厘。「首夏卷」末尾に「祭妄判」とあり。小出祭筆。

現在黎明館に所蔵されているが、その伝来については、「新樹卷」末尾の識語が手がかりとなる。識語には「右正風社十番歌合 小出祭ノ筆也／昭和六十二年初夏五月十一日／於京都受贈 新樹卷 首夏卷 于時伊勢皇學館大學／惠良宏識之」と記され、「惠良宏」の朱印がある。この朱印は「首夏卷」の末尾にも見られる。そこで、旧蔵者の惠良氏ご本人に確認をとったところ、「正風社十番歌合」は天香堂の主人から贈られ、その後惠良氏によって黎明館に寄贈したとの経緯をうかがうことができた。また、卷子本二軸は木箱に入っており、その箱書には「正風社十番歌合 新樹卷 首夏卷／惠良氏」と記されている。惠良氏から寄贈を受けた黎明館によって木箱に収められたのであろう。

なお、この巻物を仕立てた時期については記されておらず、不明である。加えて、歌合が開催された時期についても明記されていない。そのため出詠者の素性を吟味した結果、出詠者の中で最も早く没するのが前田利嗣で、明治三十三年六月十四日^④である。そして、出詠者の中で最も若いのが蜂須賀筆子^⑤であり、明治九年七月十七日に誕生している。出詠時の筆子の年齢が十五歳前後だったと仮定し、利嗣の没年を考慮すれば、明治二十三年頃から同三十三年にかけて開催されたのではないかと考えられる。

翻刻にあたり、難読で意味がとりにくい箇所を以下二点指摘しておきたい。一点目は、「新樹卷」の一番・左歌の四句目「わかばをちらし」である。結句とのつながりを考えると、若葉を散らすということがどのような情況を示すのか不明である。二点目は、「首夏卷」六番・右歌の結句「わかぬ」である。「ぬ」と判断するには若干疑問が残るが、「ぬ」以外の字には読めないため、そのように翻字を行った。

【注】

- (1) 拙稿「明治期における和歌結社『正風社』に関する一考察」(『日本文学研究ジャーナル』第四号、平成二十九年十二月)、「鹿児島県歴史資料センター黎明館所蔵『正風社十番歌合』の検討」(『鯉城往来』第二十号、平成二十九年十二月)。
- (2) 拙稿「明治期における和歌結社『正風社』に関する一考察」。
- (3) 拙稿「鹿児島県歴史資料センター黎明館所蔵『正風社十番歌合』の検討」。
- (4) 『平成新修華族家系大成 下巻』(平成八年・霞会館)による。
- (5) 「新樹巻」・「首夏巻」には、ともに「筆子」とのみ記されている。出詠者の親類関係を辿った結果、「蜂須賀筆子」が適当ではないかと考える。
- (6) 『平成新修華族家系大成 下巻』による。

凡 例

- 一 和歌は二行書きで記されているため、本稿でもそれに従った。
- 一 判詞は和歌の後に改行三字下げで記した。
- 一 適宜句読点・濁点を補った。
- 一 踊り字は、平仮名一文字の場合は「ゝ」「ゞ」、漢字の場合は「々」に統一した。
- 一 筆者による注記は、(新樹巻)のように()で示した。

一 本文中の誤字には(ママ)を付した。

図1 新樹巻

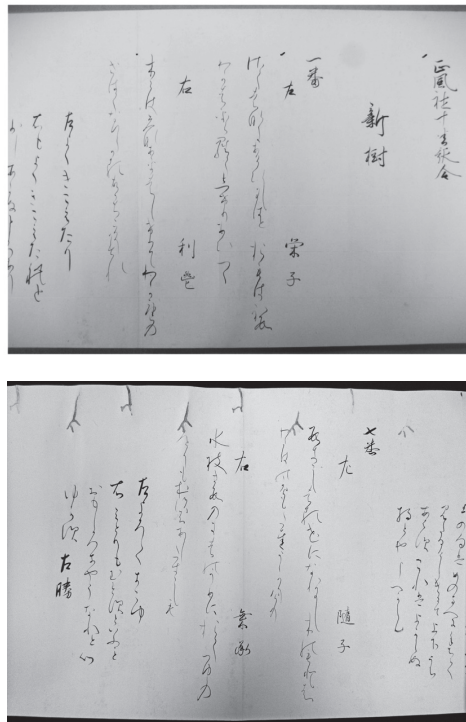
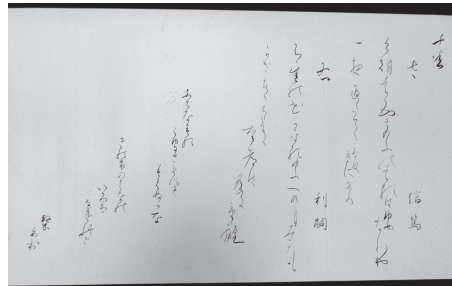
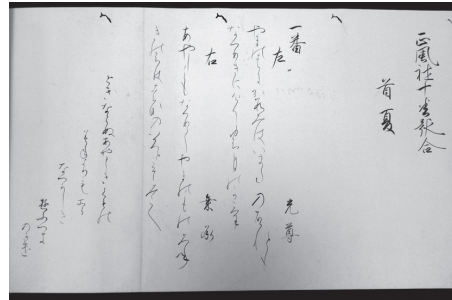
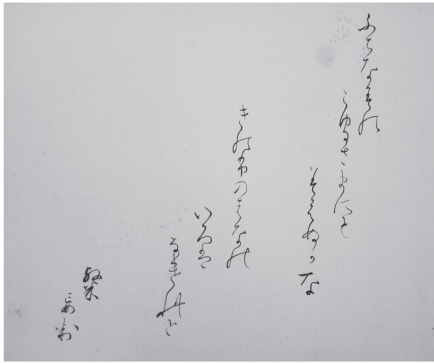


図2
首夏巻



翻刻

(新樹巻)

正風社十番歌合

新樹

一番

左

さくはなにあそびしにはとおもはれず
わかばをちらししげりあひつゝ

右

木々はみなあをばしげりてわが庭の
せばくなりたるこゝちこそすれ

左、よくきこえたり。

右もよくきこえたれど、少しあかぬところありとおぼゆ。
以左為勝

二番

左

いろもかもなつのかきねの梅さくら
おなじわかばにうすみどりなる

右

はなはちりてはるもいつしかかへるでの
わかばすゞしき夏はきにけり

左、いろもかもなつのかきねなどおもしろくいはれたり。

右もよくとゝのひてうるはしければ、いづれとも勝負をさだめかねたれど、なほよく味ひみれば、右のかたよろし。

三番

左

光尊

かへるでのわかばのいろはつゆしにも
そむるあきよりなつかしかな

右

承昭

いほのともとぎゝでひるも静なり
にはのさくらのわかばせしより

左、よくきこゆ。

右、結句いかゞ。上の句もおだやかならず、若葉する、落葉するなど、近き歌にはあれど、よろしからず。左、つゆしものとあらまほし。されど難と申ほどのことにあらねば勝とす。

四番

左

茂韶

あかざりしはなはきのふのゆめにして
青葉がくれのやどぞしづけき

右

忠元

みしはるの花のいろかもゆづるはの
しげるかげにぞたちよられける

左右ともによくよまれたり。よき持たるべし。

五番

左

正直

としへたるまつのうつほのやどり木も

ともにあを葉となりしなつかな

右

護美

わかあしのおひしげりたるかはくまに
たてるやなぎもなつになびけり

これもよき持なり。

六番

左

通禧

世のひとはなのこゝろを染めかへて
わかばにかよふ庭のあさ風

右

益子

むらさめのはれての後のなつやまは
あをばすゞしく露ぞおきける

左、三の句詮なき、いらす。

右、上の句はうち見やりたるありさま、~~上~~下の句はめのまへに
手ぢかく見たるけしきにて、~~上~~下うちあはず。これはよから
ぬ持とや申べからん。

七番

左

隨子

すぎしはる花になれにし木のもととは
わかばのかげもたちうちかりけり

右

乗承

水枝さすのきばのうめにおくつゆの
みどりもむすぶあしたすゞしも

左、よろしくきこゆ。

右、みどりもむす^{（こ）}ずといふことおもしろきやうなれど、心ゆかず。左勝

八番

左

忠敬

庭のおものはるばゝちりてしらかしの
わかばすゞしく風わたるかな

右

晴子

みづえさすころとなりぬる庭のおもは
はなにかへてのいろもめづらし

左、初二の句のつゞきいかゞ。

右、はなにかへてのいろもなどいはれたるよみ人は得意なら
めどあまりこのもしろくもおぼえず。されど、左の難あるにく
らべてはまさりたるや。

九番

左

信篤

見しはなはあとなくちりてみどりなす
わかばにそよぐ風ぞかをれる

右

朗子

藤つゝじいまだにほへるにはのおもの
こずゑはなつにしげりあひにけり

左右ともによくきこえて申むねなきうちに、右方いさゝかま
さりたるか。

十番

左

直大

おほぞらのみどりもうすぐみゆるかな
たかきこずゑのわかばしげりて

右

詮

たまがしは葉びろになりぬひさかたの
てるひのかげももらぬばかりに

左、新樹のけしきをよくいはれたり。猶いはゞたかき木末は
上のそらにむかへてたかきといはれたるならめど、木々のこ
ずゑのとたゞにいひたるかた中々によろしきか。

右も申むねなく、よくよまれたれど、左のかたすぐれたり。

(首夏巻)

正風社十番歌合

首夏

一番

左

光尊

やまのはにかすみはいまだのこれども
なつめきにけりゆふ月のかげ

右

乗承

あやしくもなつめくやまのくものみね
きのふははなのいろとこそみし

ときならぬあやしきくものみねよりも

そらなつかしきゆふづきのかげ

二番

左

忠敬

はな染めのころもぬぎすてなべてよは
なつになりたる朝ぼらけかな

右

益子

やまはみなきのふのはなのくもきえて
わかばすゞしくかぜわたるなり

ぬぎかへてあしたすゞしき夏ごろも
きのふの花もおもはざりけり

三番

左

正直

わがやどのまごとのへだてとりのけて
ひとつになさむなつはきにけり

右

利鬘

ひとごゝろかはるもはやしなつくれば
はなにとひしかぜぞまたるゝ

ひとごゝろかはるなつこそあはれなれ
へだてのさうじとりのけねども

四番

左

通禧

袖せばきけおりのきぬはかへねども
はなの香しのぶなつはきにけり

右

詮

さくはなのくもはあとなき夏やまの
木の葉すゞしき月の影かな

なつやまのあをばすゞしきかげみれば
けおりのきぬもおもはざりけり

五番

左

筆子

うぐひすのこゑきゝながらけふよりは
時鳥まつなつはきにけり

右

承昭

水えさすかしのした道つゆちりて
風さむからぬなつはきにけり

ほとゝぎすまつもあれどもみづえさす
こかげゆかしきかしの下道

六番

左

栄子

ひるがへるこひのぼりもみゆるかな
わかばさしたるにはのこのまに

右

護美

わが庵はのきばにふじのやまみえて
ゆきなほしろしわかるのうへに

ひるがへるさつきのこひもふじのねも
おなじこのまにみえわたるかな

七番

左

茂韶

なつごろもきつゝけさよりこのもとに
いろあるちりをうちらはらふかな

右

晴子

花みむとふねをつなぎしすみだがは
いまはわかばのかげとなりぬる
すみだがはわかばのかげのふかみどり
いろあるちりもいろなかりけり

八番

左

直大

たちならす庭のわかたけわかかへで
ふくあさ風のこゝちよさかな

右

忠元

はなぞめのそでぬぎかへしをとめ子が
かろきたもとに風そよぐなり
をとめごがたけよりたかくみゆるかな
あさかぜそよぐにはのわかたけ

九番

左

随子

たけの子も小枝さすまでたちのびて
よはなつとしもなりにけらしな

右

朗子

ぬぎかへてかろきたもとにふくかぜの

またるゝなつになりけるかな

かはぬぎしたけのこよりもなつごろも
かぜまつそでのなつかしきかな

十番

左

信篤

今朝はゝやきのふのはるはゆめなりや
一夜へだてゝ夏はきにけり

右

利嗣

ふぢの花かをるゆふべの月みても
かぜこゝちよきなつはきにけり

ふぢなみのこゆるさまにもみえぬかな
きのふのはなのいろはなけれど

繁妄判

〔付記〕

本資料の閲覧および翻刻掲載をご許可くださった鹿児島県歴史資料センター黎明館に、心から厚く御礼申し上げます。